四国大学紀要，(A) 58：61－72，2022
Bull. Shikoku Univ. (A) 58：61－72，2022

論文

『一遍聖絵』の和歌　―旅の実景として

石井悠加

【論文概要】
はじめに　一．巻五第二段小野寺場面と浅間山煙詠　二．巻七第二段一遍入洛時の京の非日常性　三．巻七第二段ほととぎすの歌　四．巻八第二段隠岐対岸での詠歌と承久の政変　おわりに
時宗絵巻『一遍聖絵（一遍上人絵伝）』は宗祖一遍の全国遊行の旅を描く。本論はこのうち三つの場面を取り上げて、その日付や当時の情勢、そこに収載された和歌の修辞表現などから、『聖絵』が描く一遍の旅の目的や目撃した実景などを読み取ることができることを明らかにした。

【キーワード】
一遍聖絵　踊り念仏　時衆　浅間山　承久の政変　隠岐

はじめに

一三世紀末に制作された時宗絵巻『一遍上人絵伝』（『一遍聖絵』『六条縁起』とも。以下『聖絵』）は、宗祖一遍智真（一二三九―一二八九）の伊予国での出生から兵庫の観音堂での入滅までの全国遊行の旅を描いた絵巻である。絵巻の中の一遍の旅は、南は九州大隅正八幡宮から北は奥州江刺郡（岩手県北上市）にわたり、訪問地も熊野・善光寺・四天王寺・大三島大社など、各地の重要な社寺・霊地を含んでいる。詞書の起草者「西方行人聖戒」（巻十二奥書）は一遍実弟または甥との伝承がある六条道場歓喜光寺開山の聖戒（生没年不詳）であり、作中でも時に一遍の旅に同行し、時に旅先から書状を受け、そして臨終の場に立ち会っている。『聖絵』制作にはまた時宗二祖他阿真教の関与の可能性も指摘されている（注[1]）。

『聖絵』には古写本が少なく、正安元年（一二九九）の成立で六条道場歓喜光寺旧蔵の通称「歓喜光寺本」（全十二巻、絹本著色、清浄光寺蔵、巻七絵と巻七第四段詞書のみ東京国立博物館蔵）と、御影堂新善光寺旧蔵の通称「御影堂本」（全四巻、紙本著色、尊経閣文庫蔵、個人蔵）がある。この歓喜光寺本と御影堂本の関係については、後者を紙本段階にある前者の稿本に相当すると仮定する仙海義之氏（注[2]）や、後者を前者の稿本に基づくものとし、異なる後援者の存在と異なる工房での制作の可能性を仮定する吉村稔子氏（注[3]）など、慎重な検討が続いているが、「祖師の行状を表顕するという宗教的性格よりも、旅や風景を主題とした鑑賞的性格が勝っている」という歓喜光寺本に対する吉村氏の指摘のように、両写本の

うち特に歓喜光寺本は旅の絵巻という印象が強い。

それでは『聖絵』はどのような人物の後援により制作された絵巻か。『聖絵』最終段に「一人のすゝめによりて此画図をうつし一念の信をもよをさむがために彼行状をあらはせり」とある、『聖絵』制作を促した「一人」の人物比定が小松茂美氏、岡部篤子氏ら（注4）によってなされ、現在は土御門定実（一二四一―一三〇六）説のもとに研究が進展している。

また、『聖絵』後援者の目的は何か。後援者が意図した鑑賞者としては、二人の人物が想定されている。承久の政変で後鳥羽上皇（一一八〇―一二三九）の側として戦い、配流地奥州江刺郡で亡くなった祖父河野通信（一一五六―一二二三）墓を一遍が訪れる巻五第三段に注目して、亀山上皇を候補に挙げたのは瀬谷愛氏である（注5）。『聖絵』巻頭詞書においても主人公一遍の系譜は「越智氏河野四郎通信」の孫、「河野七郎通広」の子として鑑賞者に紹介されている。また、『聖絵』の中で大きな比重を占める熊野三山場面が後白河院ゆかりの霊地であることや、巻八第二段の丹後国久美浜が長講堂領であることなどに注目し、「長講堂領を継承することで、後白河院の系譜に連なり、皇統継承を主張した伏見院の周辺」に制作者の候補を見出す可能性を探るのは梅沢恵氏（注6）である。

さて、このように『聖絵』が河野通信の存在を介して承久の政変の記憶を残す絵巻であり、大覚寺統側にせよ、持明院統側にせよ、上皇と周辺による鑑賞を期待されて作成されたものと想定した時、解釈が新たになる部分が『聖絵』にはある。全四十八段中の遊行・寺社参詣の道中場面に一遍詠として載せられた和歌である。

本論では、『聖絵』収載の一遍詠の中で、これまで存在が注目を集めることがなかった三首の詠歌状況について捉え直すことで、『聖絵』の旅の実景について考察を試みたい。なお本論では『聖絵』本文を遊行寺宝物館・神奈川県立歴史博物館・神奈川県立金沢文庫編『国宝　一遍聖繪』（遊行寺宝物館、平二七）所収翻刻により、濁点・句読点を付すなど適宜表記を改め、翻刻に誤りがあった場合、影印により訂正する。その他引用和歌本文は『新編国歌大観』に拠る。

一．巻五第二段小野寺場面と浅間山煙詠

下野国小野寺といふ処にて、にはかに雨おびたゝしくふりければ、尼法師みな袈裟衣などぬぐをみ給て

ふればぬれぬるればかはく袖のうへをあめとていとふ人ぞはかなき

あるとき時衆のあま瞋恚をおこしたりけるに

あまのはらつきわ(は)をのれとかすむものかは

（巻五第二段全文）

本段の舞台となる「下野国小野寺」（栃木県栃木市岩舟町小野寺）は、単なる旅の通過点ではなく、後に時宗の拠点の一つとなる重要な土地である。宝厳寺住職浅山円祥氏は昭和十五年発行の注釈の中で、この地を名字とした鎌倉幕府御家人である小野寺氏と時宗の関係を次のように説明している。

下野国下都賀郡小野寺村　中世小野郷と称せしが古刹大慈寺あるより、小野寺と称す。大慈寺は天台宗、常陸千妙寺末、往昔屈指の名刹なりしも今頽廃せり。今聖絵に図せる仏刹は大慈寺なるべし。現在此の地に時宗住林寺あり、一遍上人の開基にして本願は小野寺左衛門尉泰綱（系図泰通に作る通業の子）祖父通綱の為に建立する所なり。（下野国誌）（注7）

また『聖絵』とほぼ同時期に成立したもう一つの一遍行状絵巻である『遊行上人縁起』（全十二巻、嘉元元年一三〇三～徳治二年一三〇七年成立、以下『縁起絵』）によれば、一遍の入滅後、嘉元元年（一三〇三）十二月に「下野国小野寺の某」から不思議の霊夢を見たことに関しての書状が他阿真教宛に届き、これに答えたという（巻十第四段）。

さて、本段に収載された一遍詠二首の詠歌状況と内容について確認したい。この小野寺の場面の意義については全く異なる面から捉えた、砂川博氏と佐々木剛三氏による見解がある。まず砂川博氏（注[8]）は、一遍詠が詠みかける相手が「尼法師」「時衆のあま」である点に注目して、この場面を、「一遍が尼僧を厳重な監視下において遊行したという『事実』を特に強調する」ものであり、「旧仏教の側」から向けられた「辛辣な視線」に対して、時衆が「一遍の強力な指導の下に厳格な規律をもって諸国を遊行していた」ということを主張する意図で置かれた場面であると意義づけた。その上で、この二首の内容について、「時に降雨を厭い、時に瞋恚を起こす、尼の転変極まりない感情の有り様を戒めた」ものと捉えている。

そして佐々木剛三氏は、一遍が歌を詠みかけた対象ではなく、雨宿りという詠歌状況に注目する。

劇的でも何でもない平凡きわまる風景で、どうしてわざわざこんな退屈な場面を独立した一段として取り上げたのか、改めて考える必要があるようである。しかし、この何でもない情景には先例があったのである。というのは、鎌倉時代の歌人ならば誰もが憧れた西行法師（一一一八～九〇）が、偶然、雨にあい寺の軒先を借りたという故事がある。一遍の一行が借りたのも寺の前の小屋の軒先であり、はしなくも歌人西行と同じパターンの行動であったのである。これと同じような行動は、「絵伝」とほぼ同時代に書かれた『とはずがたり』にも記されていて、軒先の雨宿りは、鎌倉時代においては、歌人を自認する人にとっては大変に重要なことであったかと思われる。ここで一遍は、西行と同じような行動をとることによって、一介の僧侶ではなく歌人として認識されるようになったのだと、主張しているようにみえる。（注[9]）

ここで言及されている西行の故事とは、文明本『西行物語』や旧久保家本『西行物語絵巻』（全三巻、サントリー美術館蔵）などが奥州の旅の折の雨宿り場面に取り入れた西行の『新古今集』入集歌「誰すみてあはれ知るらむ山里の雨ふりすさむ夕暮の空」（新古今集・雑中・一六四二）である。

しかし、両氏の見解を検討する上でもう一度、それぞれの歌の詠歌状況が『聖絵』の中でどのように設定されているかを検討したい。この雨の場面・白河の関場面・墳墓参詣場面の連続に関する、西行物語絵巻との類似性という問題については別稿において検討するが（注[10]）、結論からいえば、本場面にはもう一歩踏み込んだ、同時代の鑑賞者の視線への意識が窺われるものと考えられるのである。

(1) ふればぬれぬるればかはく袖のうへをあめとていとふ人ぞはかなき

小野寺の辺りでにわかに雨に見舞われた一行が取った行動は、詞書によれば、袈裟や衣を脱ぐというものだった。その理由の説明となるのが詞書に続く画面である。歓喜光寺本の画面を見ると、花の咲く早春の下野国の田園風景と、浅山氏が大慈寺と比定した寺院が描かれている。画面全体には細かな斜線が描き込まれており、写実的に驟雨が表現されている。傘を差したり頭巾を被ったりした時衆は小走りで小さな家屋に駆け込んでいる様子である。袈裟や衣を脱いだというのは、屋内に駆け込んだ後に、衣類を干して乾かすためであったということが分かる。

この歌を解釈するに辺り、詞書中の「尼法師」という語について捉え直したい。「尼法師」という語は、これまでの現代語訳や解説で、「尼たち」「尼僧」、女性の時衆のことを指すと解釈されている（注[11]）。

しかし、『聖絵』ではつづく巻五第四段で、常陸国で悪党に略取されようとした女性時衆のことを「時衆のあま」と呼び、また本段後半でも同じく、女性時衆のことを「時衆のあま」と呼んでいる。その一方で、他阿真教の消息法語や和歌を集録した『他阿上人法語』（注[12]）では、「尼」と「法師」を併記することで男女の時衆を表現し、その接触を避けるように注意している箇所が確認される。

尼法師のあひだ。みだりがはしきやうに仰られしかばこそ。各別の道

場に居せんにはしかじとはまうせしが。ふたつの道場を期せしめぬよし仰せられければ。一所にて三境をきびしくおきて。向顔はなすとも手うつしに物もとりかはさずしてしかるべしとおぼゆ。

（『他阿上人法語』巻六「越後国古厩本郷へつかはさる御返事」）

本段で雨に濡れた装束を脱いだ「尼法師」も、『他阿上人法語』の用例と同じく、男女の時衆全員のことを指していると解釈するべきだろう。歓喜光寺本の画面を見ても、駆け込んだ男性らしき時衆が室内で上半身をはだける様子や、女性らしき細身の体型の時衆が軒先で雨に濡れた頭巾を乾かそうとしている様子が描かれている。

その時衆の様子を見ながら詠んだ一遍詠は、「袖というものは、雨が降れば濡れ、しかし濡れればまた乾くのが道理だ。それだというのに雨が降るのを人々は厭うが、その命こそが雨粒のようにはかないものなのに」というものだった。旅の道中で降る雨が旅人の心に与える影響の大きさは言うまでもない。同じ鎌倉時代成立の紀行文『海道記』でも、京を経って間もない頃に降り始めた雨への消沈が作者によって次のように詠まれている。

今日しも、習はぬ旅の空に雨さへいたく降りて、いつしか心の中もかきくもる様に覚えて、

旅衣まだきもなれぬ袖の上にぬるべき物と雨は降りきぬ

（『海道記』）（注13）

袖の上を濡らす雨は旅の艱苦の要因であり、旅の歌題となる。しかし人生に対するそれと同じように、一時の苦を苦としない姿勢を持つようにと、時衆全てを諭し励ます一遍の姿を描こうとしたと解釈できる。

(2)　くもとなるけむりなたてそあまのはらつきわをのれとかすむものかは

二首目は、瞋恚の感情を抱えた女性時衆に対して、怒りの念を雲のもととなる煙に喩えて、雲で月を霞ませることがないように諫めた和歌である。この歌は、一首目「ふればぬれ」詠が女性時衆に向けての諫めの歌であると解釈されたのに伴い、「時に降雨を厭い、時に瞋恚を起こす、尼の転変極まりない感情の有り様を戒めた」（注14）ものであるものと捉えられている。

しかし、諸注ではこれまでに指摘がないものの、『伊勢物語』第八段をはじめとする浅間山の噴煙を詠む和歌の伝統が踏まえられていると捉えれば、この一遍詠の収載にも別の意義があると考えられる。

『伊勢物語』の著名な第九段の直前には、「昔男」が東下りの道中で浅間山の煙を詠む場面が置かれている。

むかし、男ありけり。京やすみ憂かりけむ、あづまの方にゆきて、すみ所もとむとて、友とする人、ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に煙の立つを見て、

信濃なるあさまのたけに立つけぶりをちこち人の見やはとがめぬ

（『伊勢物語』第八段全文）（注15）

実際には尾張・三河国を通る東海道の旅の途中では、浅間山の山容を見ることはできない。そのため『伊勢物語』古注は第八段の存在を理解することに苦心している。細川幽斎の『伊勢物語闕疑抄』（文禄五年一五九六成立）はこの歌について「浅まのたけにたつけぶり、いせ尾張の方よりは見えまじきか。昔は煙の過分に立けるものにてこそ有つらめ。」と注を付し、浅間山そのものが見えたのではなく、甚大な噴火の煙が見えたのではないかとしている（注16）。しかしこの点については、内田美由紀氏（注17）が近年、現在の『伊勢物語』に章段配置に誤りがあると捉え、宝亀二年の制度の廃止（続日本紀）後も使用されていた東山道武蔵路を北上し、東山道に入って上野国を通り陸奥国に向かう際に左前方に遠望できた浅間山の噴煙であろうと解釈したことで問題の解消を見た。

歌の由来については「浅間山の噴煙を目にしうる地方でうたわれた民謡であっただろう。人目をしのぶ男女の恋が世間に知られるのを恐れる気持を浅間の煙に寄せた歌だが、それを東下りの話群に仕込んだのである。」

とする新大系注のように、恋心の露見を恐れる男女の民謡がもととなっている可能性が指摘されている。

浅間山の噴煙はその後も恋の歌材として用いられ、この『伊勢物語』第八段歌を本歌取りした歌や、「浅間」と「浅まし」を掛詞とした題詠歌などが勅撰集にも入集している。

雲はれぬ浅間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

（古今集・雑体・一〇五〇・平中興）

いたづらに立つや浅間の夕煙里とひかぬるをちこちの山

（新古今集・羇旅・九五八・雅経）（注18）

さて、浅間山の煙を詠む和歌の伝統を踏まえた上で、『聖絵』の一遍詠の背景としてさらに注目したいのは、天明の大噴火資料が伝える弘安四年（一二八一）六月の噴火記録である。

浅間山ハ此度初て焼出し候にてもなし。昔弘安四年六月九日の暮方、山より西に黄色之光り移り、同夜四ツ時焼出し、信州追分、小諸より南へ四り余の間灰砂降り、西に海野え続き田中之辺迄今に田地ニ火石おし出し置、北に山麓迄おし出し、其所を石とまりと言習いせり。人生百歳をたもつ者なけれは知らす。むかしより幾度も焼し由、干俣村と大笹の間に砂井川原ニも浅間之火石沢山に、石垣川除抔にて見へたり。往古も焼出せしためしなるへし。是は隣村ニ有之し古き書付を見て、後人のために筆記する所なり。

（山口魚柵『浅間焼出山津波大変記』）（注19）

『浅間焼出山津波大変記』（成立年不詳）は天明三年（一七八三）八月の浅間山大噴火の記録史料群の一つである。ここでは「隣村ニ有之し古き書付」の中の内容として、弘安四年六月九日の暮れに発生した浅間山噴火を記録している。その他、大武山義珍『浅間焼出大変記』、常見一之浩斎『天明浅嶽砂降記』（寛政三年一七九一序）とその類本など（注20）が同様に弘安年間の噴火の伝承を伝えている。

ここで『聖絵』が描く一遍たちの信州・奥州の旅の経緯を整理したい。『聖絵』巻五は、一遍たちは弘安二年春から八月にかけて京の因幡堂に滞在（巻四第四・五段）したのち、江州守山の琰魔堂（滋賀県守山市）を通過し（巻四第五段）、道中四十八日間をかけて信州善光寺に到着したものとしている。

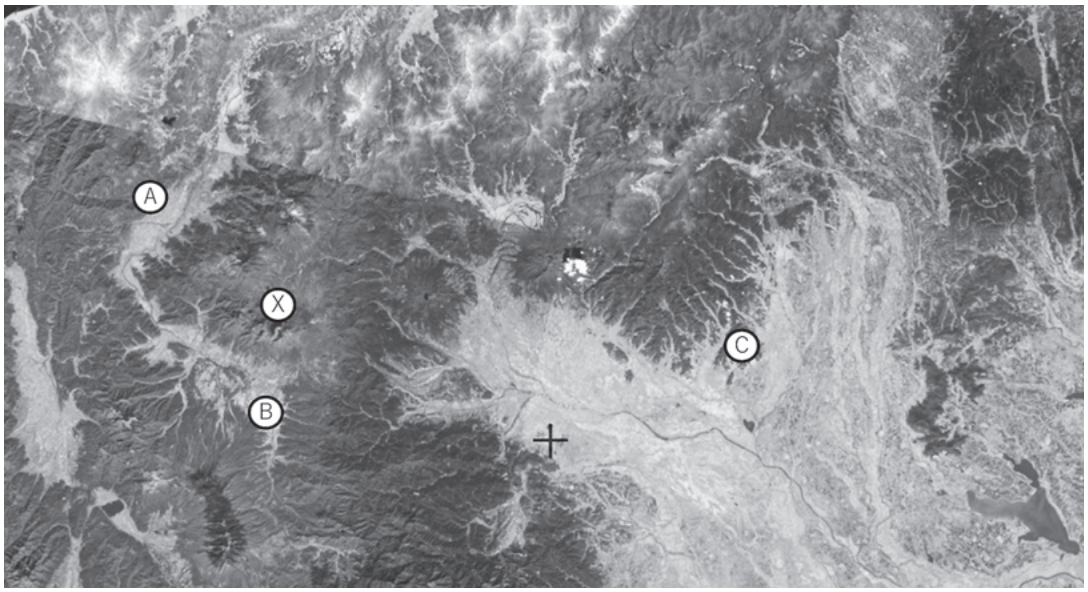
同年八月に因幡堂をいでゝ、善光寺へおもむき給。道の間の日数、自然に四十八日なり。其年信濃国佐久郡伴野の市庭の在家にして歳末の別時のとき紫雲はじめてたち侍りけり。（後略）（巻四第五段）

絵では江州守山から北陸沿いに到着したはずの善光寺参詣の場面は省略され、巻四第四段には同年の歳末別時を信濃国佐久郡伴野で行った際の、紫雲屹立の場面が描かれている。その後、一遍たちは同郡小田切里で初めての踊り念仏（同五段）を行い、同郡の武士大井太郎の邸宅で数百人規模の踊り念仏を行った頃には弘安二年の冬を迎えていた（巻五第一段）。そして「弘安三年善光寺より奥州へおもむき給に」（巻五第三段）と、弘安三年（一二八〇）には再び善光寺に参詣したらしい（【図1】地点A）。その後は信州・奥州を経由して、弘安五年三月一日に鎌倉こぶくろ坂に至っている（巻五第五段）。巻五はその約二年間とみられる旅の道中を描くが、そこには次の地名が確認できる。

・下野国小野寺（栃木県栃木市岩舟町）巻五第二段
・白河の関（福島県白河市）巻五第三段
・松島（宮城県宮城郡）巻五第四段
・奥州江刺郡（岩手県北上市）巻五第三段
・常陸国（茨城県）巻五第四段
・武蔵国石浜（東京都台東区）巻五第四段

右の旅を描くにあたり、巻五第二段画面は庭木に花が咲く春の小野寺を、巻五第三段は錦秋の白河の関、晩秋の奥州江刺郡河野通信墓を描き、巻五第四段は雪の常陸国を描くというように、巻五は四季の一巡を絵画の中に

【図１】浅間山・弘安二～三年遊行の地位置関係図



国土地理院地図（電子国土 Web）をもとに加工・作成

（A）信濃国善光寺
（B）信濃国佐久郡
（C）下野国小野寺
（X）浅間山

取り入れているため、下野国から奥州常陸国に至る旅を弘安四年のものとして描いているらしい。つまり『聖絵』によれば、一遍たちが佐久郡伴野から善光寺へ参詣した後、浅間山のふもとを通り、下野国小野寺へ向かい関東平野西部を旅していたのは、弘安二年秋から三年春にかけての時期となる（【図1】地点）（A）～（C）参照）。

火山の噴火前には短期的・長期的な前兆現象が確認される。また浅間山は佐久郡では言うまでもなく、栃木県栃木市からも西方に山容を望むことができる山である（注[21]）。一遍が弘安三年に浅間山の煙を和歌に詠んでいることは、天明の災害記録に書き写された「隣村ニ有之し古き書付」が伝えた弘安四年六月九日の浅間山噴火の史実性を検証するための資料ともなるのではないか。『聖絵』詞書や和歌には浅間山の存在への言及はなく、画面にも描かれていない。しかし浅間山の煙によって女性時衆の瞋恚を諌めた一遍詠は、『伊勢物語』の影響下にあるだけでなく、関東平野西部の旅の実景に基づいたものであったと考えられるだろう。

巻五第二段は『聖絵』には珍しい、一遍が同行する時衆の出家者たちにどのように相対したかを伝える場面であり、一遍が全ての時衆に対して誠実に、にわか雨や噴煙に寄せて、一時的な感情の無意味さを和歌で教え諭したことを示そうとしている。そしてこれは、東国の旅の様子を写実的に描くだけでなく、歌物語や歌枕の文脈を念頭に置いて鑑賞されることを想定した場面であると言えるだろう。

二．巻七第二段一遍入洛時の京の非日常性

巻七は鎌倉から美濃国・尾張国・近江国草津を経由して弘安七年（一二八四）閏四月に再び京に戻った一遍と時衆が、様々な階層の人々の熱狂的な人気を集めたこと、滞在の中で貴顕、寺僧と和歌の贈答などを交わしたことなどを詞書に述べ、画面には一遍に熱狂的な注目を寄せる群衆

を描いている。

同七季閏四月十六日、関寺より四条京極の釈迦堂にいり給。貴賤上下群をなして人はかへり見る事あたはず。車はめぐらすことをえざりき。一七日ののち、因幡堂にうつり給。そのとき土御門入道前内大臣、念仏結願のためにおはしまして後におくり給へる

一声をほのかにきけどほととぎすなをさめやらぬうたたねのゆめ

返事　聖

郭公なのるもきくもうたたねのゆめうつつよりほかの一声

同出離生死のおもむきたづねつかはされける御返事云、

他力称名は、不思議の一行なり。弥陀超世の本願は、凡夫出離の直道なり。諸仏深智のおよぶところあらず。いはむや三乗浅智心をうかゞはむや。諸教の得道を耳にとゞめず、本願の名号を口にとなへて、称名のほかに我心をもちゐざるを、無疑無慮乗彼願力定得往生といふ。南無阿弥陀仏とゝなへて我心のなくなるを、臨終正念といふ。このとき、仏の来迎にあづかりて極楽に往生するを、念仏往生といふ、云々。

（巻七第二段前半）

一遍たちは関寺（滋賀県大津市）から四条京極の釈迦堂（京都市中京区）に入り、七日間の滞在ののち、因幡堂（京都市下京区）へ移り、やがて、三条悲田院と蓮光院に短期間滞在の上、雲居寺、六波羅蜜寺を巡礼し、空也上人遺跡市屋道場と移動した。滞在期間については「京中の結縁首尾自然に四十八日にて侍しが、市屋にひさしく住給しことは」（巻七第三段）と、四十八日間の滞在であり、市屋道場を拠点としていたことが述べられている。その滞在ののち、丹後国へ向かって旅立つために五月二十二日に洛西桂へと移り、巻七が結ばれる。

さて、この京入りで注目したいのは、「同七季閏四月十六日、関寺より四条京極の釈迦堂にいり給」と、日付を記している点である。『聖絵』『縁起絵』ともに、旅の過程を日付まで詳述した場面は少なく、年や季節のみを書き留めた場面が多い。しかし一遍入洛の場面については『聖絵』『縁起絵』ともに弘安七年閏四月十六日という日付を明示している。

公家日記等の現存が乏しい弘安年間の宮中・洛中の様子を窺い知るには、広橋兼仲（一二四四―一三〇八）の日記『勘仲記』（『兼仲卿記』）や、内裏・上皇御所の人間関係・行事等を知ることができる後深草院二条の回想記『とはずがたり』、そして『とはずがたり』をも典拠に含む『増鏡』などが手がかりとなる。しかし、これらの弘安年間の日記・回想においては、『聖絵』『縁起絵』が描くような、弘安七年閏四月から五月にかけての一遍滞在と熱狂的な群衆の記録やその噂の片鱗などは全く窺うことができない。

ただし、よく知られているように、永仁四年（一二九六）に制作された絵巻『天狗草紙』伝三井寺巻A（中村家本）と、『天狗草紙』伝三井寺巻の異本である成立年不詳の『魔仏一如絵詞』（日本大学総合学術情報センター蔵）、詞書のみの釵阿による写本『七天狗絵』第七（金沢文庫蔵）の巻七、そして歌学書『野守鏡』などは、弘安七年の一遍入洛の時の民衆の熱狂を伝えている。

『天狗草紙』については、一遍たちの信仰や入洛時の行動の様子を記録し、かつ批難するものでありながら、『縁起絵』祖本と同一の作画工房で制作された可能性が高いとする土屋貴裕氏の研究がある（注[22]）。『天狗草紙』に描かれた一遍の容貌は、『縁起絵』『聖絵』に描かれた一遍と酷似している。牛車が立ち並ぶ路上や、食べ物を囲んで輪になって飲食したり、一遍を中心に踊り跳ねたりする時衆の姿は『縁起絵』『聖絵』が描く光景とも共通している。ただし『天狗草紙』が時衆を見つめる視線は厳しく、花が降るという奇跡の噂を信じる人々の側にはそれを訝しがる人々がおり、頭上では天狗が花を降らせている。一遍の尿を妙薬と信じて求める京の人々が一遍を囲んで竹筒を差し出す異様な光景も描かれている。正反対の視線によって描かれた『聖絵』『縁起絵』と『天狗草紙』の洛中賦算の熱狂は、

当時の実際の様子から生まれたものである可能性が高いだろう。

では、公家日記や物語には残らなかった、「貴賤上下」の垣根を超えたという様々な階層からなる熱狂的群衆とは、どのようにして発生したものか。群衆の熱狂は非日常的空気の中から生まれる。一遍と時衆を迎えた弘安七年閏四月・五月の京の空気が非日常性を帯びていた要因として注意されるのは、次の二つの事柄である。

①大雨による市中の河川氾濫

一遍らが京に入ったとされる日付の翌日、洛中には増水による被害が発生している。

『勘仲記』閏四月十七日条

雨降、不出仕、洪水溢洛中、烏丸川・西洞院川等不及通人馬云々、一条前殿・今出川等為水底云々、近衛殿烏丸面棟門流失、築地等悉顛倒、町并西洞院等小屋多流失、洛陽水害頗無先規歟、今日亀山殿御月忌、無臨幸、（略）

『勘仲記』閏四月二十一日条

（…略）今日依洪水無御参。烏丸川・西洞院川等、車馬依不通也。（注23）

当時四十一歳の広橋兼仲が「頗無先規歟」と記録したほどの用水氾濫である。広橋兼仲の居所がある勘解由小路は被害水域西に近接しており、そのため被害の情報が集まったものらしい。また反対に、川東に滞在していた一遍たちの動向は耳にすることができなかったものと考えられる。兼仲によれば、降り続く大雨により、現在の京都御苑西側を南北に走っていた烏丸川と西洞院川が増水し、前関白一条実経（一二二三―一二八四）第や西園寺家の今出川第も浸水しているほか、近衛家基（一二一六―一二九六）の近衛殿（注24）の烏丸小路に面した棟門と築地も流失する被害に遭っている。更には町小路・西洞院大路の「小屋」の多くが洪水に流されたという。摂関家の邸第も庶民の居住地帯も水害を被ったさなかの一遍入洛であった。

②北条時宗の死

二度目の元寇を三年前に退けた後も依然九州警固を続ける幕府から、執権北条時宗の三十四歳という若さでの死の噂が京に伝わってきたのは、『勘仲記』によれば四月八日のことである。この時点では訃報はまだ確実なものではなく、四日に出家したのちに亡くなったのではないか、または出家はしたが生存しているのか、という情報であった。訃報は翌日に正式のものとなり、二十八日に「所労出来」、程なく亡くなったのだという事実が伝わる。鎌倉幕府執権の死は「関東穢」であり、源頼朝や、北条義時、政子、将軍頼経室、北条泰時、北条経時などの先例に鑑み、閏四月三日までの三十日間の「穢限」が定められることとなった（九日条）。ここで後宇多天皇の方違行幸の停止、殺生禁断、諸社祭や日吉祭の延引が決定する。『勘仲記』四月十日条所引後宇多天皇口宣は「近日柳営穢気依触来、花洛祭礼難被行、宜停止賀茂祭・中山祭・大神祭等、日吉祭・吉田祭（後略）」と、鎌倉幕府執権の死穢により京の祭礼を停止する旨のものであり、『勘仲記』からもその後実際に四月の洛中での祭礼が取り止められていく様子が確認できる。

①②のように、一遍たちを迎えた弘安七年閏四月の京の空気は非日常性を帯びていた。それは執権の死により祭礼が延引された都市の不穏な静寂であり、大雨で一夜にして貴顕や庶民の日常が押し流された喧騒でもあった。「貴賤上下群をなして人はかへり見る事あたはず」という群衆は、この空気の中から生まれたことに留意したい。

三．巻七第二段ほととぎすの歌

ここで生じる疑問は、『勘仲記』の記載と『聖絵』『縁起絵』の間の齟齬である。『勘仲記』には一遍たち時衆が市中に巻き起こした熱狂への言及が一切なく、また反対に、『聖絵』『縁起絵』には市中の増水被害の描写が

ない。本段は時制が助動詞「き」で記述されており、詞書起草者である聖戒自身の記憶に基づいた文章部分であるため、京都で一遍らに同行し、水害の様子を把握し上で、聖戒は絵巻から水害や時宗の死の説明を除外したことになる。

しかし、右のような京の状況があることを了解すると、前掲の一遍と「土御門入道前内大臣」との贈答歌の文脈を解釈することが可能となる。

一声をほのかにきけどほととぎすなをさめやらぬうたたねのゆめ（通成）

郭公なのるもきくもうたたねのゆめうつつよりほかの一声（一遍）

「土御門入道前内大臣」については、後嵯峨院の寵臣で後嵯峨院宸筆御八講の二ヶ月後の文永七年十二月に四十九歳で剃髪（注[25]）した中院通成（一二二二～一二八六）に比定されている（注[26]）。中院通成の邸第は「三条坊門第」と呼ばれ、三条坊門万里小路に位置していた（注[27]）。『勘仲記』十七日条には名が挙がらないが、増水した烏丸川の様子が確認できる距離にある。また、一遍たちが滞在した四条京極釈迦堂、因幡堂、三条悲田院などからも近い。

二人が詠み込んだ明け方のほととぎすは伝統的な初夏の歌題であり、古今集の「ほととぎす夢かうつつか朝露のおきて別れし暁の声」（古今集・恋三・六四一・読人不知）や「世中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらず有りてなければ」（古今集・雑下・九四二・読人不知）の歌例のように、夢うつつの中で鳴き声を待ち聞くものとして詠まれた。通成は、ほととぎすの鳴き声にもまだ目覚めることができない自分であることを詠み、一遍はそれに対して、ほととぎすの鳴き声が夢や現実といった認識の外に存在することを返している。つまりここでのほととぎすの声とは、通成が聴聞した一遍の教えを指すものだろう。しかし通成が現世を夢と認識する契機となったのは、この日の京の状況そのものだったのではないだろうか。

四．巻八第二段隠岐対岸での詠歌と承久の政変

『聖絵』巻八第一段によれば、弘安八年（一二八五）、一遍たちは洛中で四十八日間の賦算・踊躍念仏を行った後、桂から穴太を過ぎて、丹後国へと旅立っている。この旅は一年余りにわたる、「北国をまは」る（巻八第四段）ことを目的とした遊行だった。

この北国の旅の最も印象的な場面が、竜の結縁を描く巻八第二段である。一遍たちは丹後久美浜で踊り念仏を行った際、波間から竜が現れるのを目撃し、次に但馬国の「くみ」でも雷を伴う暴風雨に見舞われた。それは竜が供養に来たものといい、一行は水没する道場で踊り念仏を続けた。その後一行は、因幡国から伯耆国逢坂（鳥取県西伯郡大山町）へ廻り、美作国一宮（中山神社、岡山県津山市）で釜鳴の奇瑞に会い（同三段）、弘安九年の内に摂津国四天王寺へと到着した。

この海沿いの山陰道の旅は、『聖絵』巻八第一～三段のみが記録した旅である。『縁起絵』では、洛中での賦算を描いた巻三巻末からそのまま弘安九年の四天王寺参詣を描く巻四巻頭へとつながっている。

目立った寺社や霊地がないこの旅を『聖絵』のみが描いた目的は何か。砂川博氏（注[28]）は鎌倉時代中期の丹波で善光寺信仰が広く流布していた点に言及した。また梅沢恵氏（注[29]）は、丹後久美浜が長講堂領であった点に注目し、ここから伏見院近臣と久美浜の関わりや、亀山院の思惑と結びつく形で弘安の徳政を推進した安達泰盛滅亡への一遍の言及（巻九第二段）などから、『聖絵』制作が伏見院周辺で行われた可能性を指摘している。

ここにもう一つ指摘を加えるならば、この山陰・山陽の旅の折り返しとなるのが伯耆国逢坂であるという点である。

伯耆国おほさかと申所にて雪の中にひとりうづもれ給て

つまばつめとまらぬ年もふるゆきにきへのこるべきわが身ならねば

（巻八第二段末尾）

【図２】隠岐島・弘安八年遊行の地位置関係図

国土地理院地図（電子国土 Web）をもとに加工・作成

（A）丹後国久美浜
（B）但馬国「くみ」推定地（豊岡市竹野町竹野）
※『国宝一遍聖繪』（遊行寺宝物館、平二七）による。
（C）伯耆国逢坂
（D）美作国一宮
（X）隠岐島

歌意は「積もるのならば積もれ。止まることがない歳月の経過のように降る雪が溶けた後に消え残るべき我が身ではないのだから」と解釈できる。降り積もる歳月を雪に重ねて詠むのは歳暮和歌の典型であり、安達泰盛が討たれた弘安八年十一月十七日当日に因幡国に一遍たちは滞在していることから（巻九第二段）、詠出年時は弘安八年末となる。ただし、歳月の経過と死の接近を嘆かずに受け入れるという心情は、歳暮和歌としては特異である。

「雪の中にひとりうづもれ給て」という状況もまた『聖絵』の一遍詠の中では異例である。この旅は「けり」で語られており、聖戒自身は同行していない。重要な寺社や伝承とも関わりのない土地で、ただ雪の降る中で歳末に一人詠吟するという状況を、なぜ本段は末尾に置いたのか。

【図２】により伯耆国逢坂の位置を確認したい。（C）の逢坂は伯耆街道の海べりの宿場で、（X）の隠岐島の対岸に位置している。逢坂は、近世成立の軍書『伯耆の巻』（注30）では、元弘三年（一三三三）に隠岐島を密かに脱出した後醍醐天皇が飲水の補給のために上陸した地としても登場する。そして海を挟んで逢坂と対峙するこの島に流され、十八年間の後に終焉を迎えたのが後鳥羽上皇であり、ここに本段と巻五第三段の東国の遊行との共通点がある。奥州江刺郡と伯耆国逢坂はともに『縁起絵』が省略し、『聖絵』が独自に描き残した旅の辺縁であり、承久の政変の記憶と強く結びついた死者の訪問の旅なのである。

また、逢坂での一遍詠が歳暮和歌であることは、暗に時衆が歳末別時念仏を逢坂で修したことを意味するだろう。【図２】（A）～（D）の行程を見た時、逢坂が旅の折り返し地点になっていることから、あるいは旅の目的を逢坂での歳末別時念仏とする仮定も可能である。歳暮の雪の中で隠岐島と一人対峙する一遍の姿は、承久の政変への、一遍、あるいは『聖絵』制作者周辺の思いを示したものではないだろうか。そして遁世の意義を「追孝報恩のつとめ」「一子出家すれば七世の恩所得脱することはり」として、

祖父墓前でその旨を詠む巻五第三段と、一族の運命を動かした後鳥羽上皇終焉の地に向き合い、遁世者である自分をこの世に消え残るべきではないものと詠む巻八第二段は呼応している。『聖絵』が描くこの二つの旅路は、教線拡大の記録とは異なる趣旨のものなのではないだろうか。

おわりに

以上、『一遍聖絵』における三つの場面に着目して、『聖絵』において和歌が果たす役割の一端について検討を試みた。

『聖絵』詞書においては、一遍の旅の行程を述べる際に、年のみを記す場面、季節を示す場面、月日を示す場面、日付まで示す場面など、年月日の記載の詳細さに差がみられる。しかし、巻七の入洛場面を今回取り上げたように、当時起きたできごとを調べていくことで、その日付を『聖絵』が記載した意味について再考できる可能性が残っている。また、旅の通過点についても、それが伝統的な歌枕の地である場合はもちろん、そうではない場合でも、一遍詠の修辞表現を歌枕の伝統や歌物語という文脈から読み解くことで、『聖絵』が描こうとした実景を読み取り、その旅路の目的について考え得る可能性が残されている。

付記

本研究はJSPS科研費JP20K22002（日本学術振興会科学研究費助成事業研究活動スタート支援「中世絵巻にみる和歌と絵画の相関関係―浄土系高僧伝の詞書の検討を通じて―」）の助成を受けたものです。

1　高野修「『一遍聖絵』もう一人の編者」（砂川博編『一遍聖絵の総合的研究』平一四、岩田書院）

2　仙海義之「歓喜光寺本『一遍聖絵』の絵画表現について―御影堂本との比較から―」（『美術史』一四九、平一二・一〇）

3　吉村稔子「二つの一遍聖絵―歓喜光寺本と御影堂本―」（仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第30冊『研究発表と座談会　一遍聖絵の諸相』平一五・三）

4　小松茂美「〈一人のすゝめによりて〉成立した『一遍上人絵伝』」（小松茂美編『一遍上人絵伝』〈日本絵巻大成別巻〉中央公論社、昭五三）、岡部篤子「歓喜光寺本「一遍聖絵」の制作後援者「一人」について」（『古美術』八五、昭六三・一）

5　瀬谷愛「社寺参詣曼荼羅としての一遍聖絵」（遊行寺宝物館監修・五味文彦編『国宝一遍聖絵の全貌』高志書院、平三一）

6　梅沢恵「『一遍聖絵』の構成原理と制作背景に関する試論」（『研究発表と座談会　一遍聖絵と遊行上人縁起絵』仏教美術研究上野記念財団研究報告書第46冊、令二・三）

7　浅山円祥『一遍聖繪六条條縁起　付一遍上人繪詞傳』（山喜房仏書林、昭一五初版、昭二七再版）

8　砂川博『徹底検証　一遍聖絵』第五章（岩田書院、平二五）

9　佐々木剛三「『一遍上人絵伝』とその特質」（『神道曼荼羅の図像学―神から人へ―』ぺりかん社、平一一）より、「西行」『とはずがたり』の説明に関する丸括弧内の説明を省略し引用。

10　拙稿「西行伝絵巻と時宗―『一遍聖絵』『遊行上人縁起絵』東国遊行の場面について―」（『西行学』一三号、令四・九掲載予定）

11　橘俊道『現代語訳一遍ひじり絵』（山喜房、昭五三）、栗田勇『一遍上人―旅の思索者』（新潮社、昭五二）、高野修『一遍聖人と聖絵』（岩田書院、平一三）、遊行寺宝物館・神奈川県立歴史博物館・神奈川県立金沢文庫編『国宝　一遍聖繪』（遊行寺宝物館、平二七）

12 成立年不詳。『時宗全書』（藝林舎、昭四九）、大橋俊雄解題。
13 長崎健ほか校注訳『中世日記紀行集』〈新編日本古典文学全集48〉（小学館、平成六年）
14 砂川博『徹底検証　一遍聖絵』第五章（岩田書院、平二五）
15 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注訳『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』〈新編日本古典全集12〉（小学館、平六）
16 堀内秀晃・秋山虔校注『竹取物語　伊勢物語』〈新日本古典文学大系17〉（岩波書店、平九）付録
17 内田美由紀『伊勢物語考Ⅱ―東国と歴史的背景』（新典社、令三）
18 元久三年（一二〇六）七月和歌所歌合「羇中暮」題に出詠。衆議判に「『立つや浅間の』といへること、もっともめづらし。勝つべし」
19 成立年不詳、写本。萩原進編『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ　記録編（一）』（群馬県文化事業振興会、平成元年）所収。
20 萩原進編『浅間山天明噴火史料集成Ⅱ　記録編（一）』（群馬県文化事業振興会、平成元年）
21 栃木県教育委員会ウェブサイト「とちぎふるさと学習」（https://www.tochigi-edu.ed.jp/furusato/）
22 土屋貴裕「『天狗草紙』の作画工房」（『美術研究』四〇三、平二三・七）
23 高橋英樹・櫻井彦・遠藤珠紀校訂『勘仲記　第四』〈史料纂集　古記録編〉（八木書店、平二七）
24 『続史愚抄』同日条「内大臣家基第。室町東。近衛北。」
25 『公卿補任』『尊卑分脈』
26 浅山円祥『一遍聖繪六条條縁起　付一遍上人繪詞傳』（山喜房仏書林、昭一五初版、昭二七再版）、三枝暁子「『一遍聖絵』成立の背景」（中世史研究会会報『遥かなる中世』一八、平一二・三）ほか。
27 『勘仲記』弘安六年正月八日条、『増鏡』老のなみ。加納重文「『増鏡』の里内裏」（『峯村文人先生退官記念論集　和歌と中世文学』東京教育大学中世文学談話会編集発行、昭五二）参照。なお現在の京都ＹＭＣＡ（京都市中京区下丸屋町）近辺が該当する。
28 砂川博『徹底検証　一遍聖絵』第八章（岩田書院、平二五）
29 梅沢恵氏「『一遍聖絵』の構成原理と制作背景に関する試論」（『研究発表と座談会　一遍聖絵と遊行上人縁起絵』仏教美術研究上野記念財団研究報告書第46冊、令二・三）
30 近世初頭成立と推定される軍書。『群書類従』第二十輯合戦部四所引。『群書解題　一三』、『国史大辞典』「伯耆之巻」項参照。